



Love Like Winter.

僕の目の前で、彼女は肉まんを食べている。

放課後の教室は、僕と、僕の目の前で机の上に座った彼女のふたりしかいなかった。

「なあ、その肉まんどうしたの？」

「肉まんじゃないよ。あんまん」

訂正。僕の目の前で、彼女はあんまんを食べている。

「それじゃあ、そのあんまんどうしたの？」

「うん、買ってきた。ほら、最近寒くなってきたじゃない？寒いときには、やっぱりこういうの食べたくなるじゃない。コンビニでも、こっちを誘惑するように、わざわざレジのところに温め機があるし。って、あれって温め機って名前で良いのかな？」

「良いんじゃない？」

たぶん、メーカーのカタログに載るような正式な名前はあるのかもしれないけど、ここで僕と彼女が話すぶんには、温め機で十分だ。

「そんなことより、寒いんだったら、窓閉めたら？」

たぶん、コンビニに行って、戻ってきて、そのままなんだろう。彼女はコートを羽織って、マフラーまでして、長い足を椅子の上に投げ出している。その、スカートから覗くほっそりとした素足が、眩しい。教室の掃除のときに開けた窓から吹く12月の風が、彼女の長い髪をくすぐっている。

「こうやって『寒い』って思いながら食べるあったかいものって、最高じゃない？」

確かに、彼女の言うことにも一理はある……のか？でも、寒い地方じゃあったかい部屋の中で、冷たいアイスを食べるって言うしなあ。

「そうそう、そんな感じよ」

と、彼女も納得してるし、まあ、そんなものなのかもしれない。

「でも……」

やっぱり、見てるこっちの方は寒く感じてしまう。彼女はあったかいあんまん食べてるからいいかもしれないけどさ。

「なあに？あなた、寒いの？」

「いや、別に、僕は寒くないけどさ……なんか、見てると寒く見えてしまうというか……」

「ふうん。もしかして、素足だから寒く見えるのかな？」

そう言いながら、僕にその足を見せつけてくる。

「ねえ、寒く見えるんだったら、暖めてくれる？」

白くて、柔らかそうな足。

「暖めろって、どうやってさ？」

「お好きなやり方でどうぞ」

そう言われても、ね……

「その足を暖めてあげれば良いの？」

「あなたがそれで十分だって思ってるなら、ね」

挑戦的な視線。

「それじゃあ、どこを暖めて欲しいのさ」

そう言いながら、僕は、さっきまであんまんを食べていた、彼女の唇を見つめる。

「—どこを暖めてもらえれば、女の子は喜ぶと思う？」

「さあ、どこだろうね」

そっと、彼女の後ろから、腕をまわす。

「どういうつもり？」

すぐそばから、声が聞こえる。

「こうすると、暖かくなるかい？」

「さて、どうかしらね」

そっと添えられた、彼女の細い指が、答えだと思った。

"Love like winter" is over.